

音

作

折田

登
場
人
物
男
女
医
者

0

喪服の女が一人座っている。

雨の音がしている。

喪服の女、ぼんやりと窓のそとに目を向けている。

少し離れた場所に、その女を見つめる男が立っている。

雨の音がしている。

女

「何の、音だったかしら……。」

暗転。

1

医者

「音忘れの症状ですね。」

明かりがつく。

医者と女が向き合って座っている。男、女のそばに立っている。

女

「オトワスレ、ですか？」

医者

「ええ、音忘れ。人間って生まれた頃は、当然、何の音も知らないでしょう？」

雨の音、ドライヤーの音、ピアノの音……。少しずつ、覚えていくでしょう。音

忘れはね、そういった、少しずつ貯えていった音をね。今度は少しずつ、忘れて

いってしまうんです。音をしまっておく箱の底が、こう、なくなってしまうてい

る状態、とでもいいでしょうか。雨の音をしまっていた箱の底が、なくなる。ド

ライヤーの音をしまっていた箱の底が、なくなる。そんな具合です」

女

「はあ……(あまりわかってない)」

男

「それは、治るものなんですか？」

医者

「問題ありません。とにかくストレスをためないように、気をつけてもらうことが一番です」

男

「わかりました、ストレスですね」

医者

「見たところ症状も軽度のように、早い人だと、数日で治ることもありますから」

女

「そうですか、数日で」

医者

「早い人だね。ま、とにかく、ストレスに気をつけて過ごしてください」

男と女、医者に一礼してから席を立ち、医者と反対方向へ歩きだす。医者、2人とは反対方向へ歩きそのまま退場。

男と女、舞台の端まで移動すると、また舞台の中央へ向かう。
2人、椅子に座る。
女の自宅である。

男 「不便なことがあったら遠慮せずに言うんだよ」

女 「今のところ、ちつともないわ。ただ、何か音がすると、ああ、この音は何だったかしらって、少し思うだけよ」

男 「そっか。それならいいんだけど」

女 「ねえ。あのお医者さま、何だか胡散臭かったわ」

男 「失礼だよ」

女 「あなたはそう思わなかった？」

男 「正直に言うよ、少しだけ」

女 「ほらね。でも受付の女の人、あの人はずっと良い人よ」

男 「そうなのかな。オレにはよく分からなかったけど」

女 「とてもハキハキとした声で患者の名前を呼ぶの。笑顔も素敵だったわ、目までしっかり笑ってて。……そうだわ、彼女の耳」

男 「耳？」

女 「そう、耳。彼女、とても良い耳の形をしていたの」

男 「へえ、耳」

女 「きつとどんな音もうっとりするほど美しく聴こえる耳よ。一度聞いた音を、ずっと閉じ込めておけるような耳よ」

男 「オレは、君の耳もそれと同じくらい魅力的に感じるよ」

女 「私の耳はダメよ。もうこの耳では聞けない音が沢山あるんだもの。……私、この耳でどうやって音を聞いていたのかしら。紙と鉛筆が擦れる音。牛乳をカップに注ぐときの音。爪を切る音。どんな音だったのかしら。いつか、自分の声も、あなたの声も、忘れてしまうのかしら……」

男 「心配いららないよ。数日で治ると医者も言っていたじゃないか」

女 「早い人だとね」

男 「そう、早い人だとね」

男、微笑む。

男 「コーヒーを淹れてくるよ」

男、舞台袖へ。

男、鞆を持ちすぐ舞台へ戻ってくる。

女、男が出ていってすぐ、下手奥にある化粧台に向かい化粧をはじめ。
男が再度登場したとき、舞台上では数日が経過している。

男 「調子はどう？(カバンを置きながら)」

女 「うーん、何となく、いい気がする」

男 「それなら良かった。何か思い出した音はある？」

女 「ええ、まあ、そうね、多分……」

男 「多分？」

女 「ごめんなさい。本当はどの音を忘れてしまったのかすらわからないの」

男 「何を謝ることがあるんだよ。大丈夫、ゆっくり落ち着いて、少しずつ治していこ

う。オレに出きることならなんだってするよ」

女 「ありがとう」

男 「どうする？ これから。ショッピングじゃなくて病院にする？」

女 「いやよ、そんな味気ないデート」

男 「それもそうだね。病院のランチは美味しくなさそうだし」

女 「私、今日は喫茶ロイエのデミグラスのオムライスって決めてるの」

男 「ロイエか。じゃあオレは……うーん。どうしようかな」

女 「シチューにしてよ。オムライスに少しかけさせて」

男 「え、デミグラスの上に？」

女 「そう」

男 「そう……」

女、上機嫌そうに鼻歌を口ずさむ。男、しばらくそれを聞いている。

男 「キミが鼻歌を忘ないでいてくれてよかった」

女 「え？(鏡から目を離さず)」

男 「キミの機嫌がすぐわかる」

女 「なあにそれ」

男、微笑む。

女、また鼻歌を口ずさむ。

女 「もうちょっと待っててね。あ、台所は好きに使っていいから」
男 「急がなくていいよ。コーヒーでも飲んでゆっくりしてるから」

男、台所へ。

コーヒーを探すが、いつもの場所にないらしく「あれ」や「んん？」など声をも
らしている。

男声 「コーヒーどこ置いた？」

女 「ごめん、昨日切らしちゃったの」

男声 「了解」

男、台所から戻ってくると、鞆を持つ。

男 「ちょっとコンビニ行ってくる」

女 「んー、じゃあ、お願い。ごめんね」

男 「ついでにタバコも買いたいから。コーヒーは？」

男・女 「ネスカフェー(変更可)」

男 「小さく笑い(他に何か欲しいものはある?)」

女 「大丈夫(化粧に夢中)」

男 「わかった。すぐ戻るから」

女 「いってらっしゃい」

男が出ていく。

女、また鼻歌をうたいはじめる。

女の鼻歌。

強いブレーキの音。

衝撃音。

鼻歌が止まる。

女はわずかに反応するばかりである。

女 「何の、音だったかしら」

2 明かりがつく。医者と女が座っている。

男、離れた場所から女を見つめている。

医者 「誰にでもわかるような何かの音を出しながら(これは?)」

女 「……」

医者 「さっきとはまた違う音を出しながら(これは?)」

女 「……」

医者 「なるほど、症状が随分進行してしまっているようですね」

女 「はあ、そうなんですわね」

医者 「とにかく、ストレスを避けていただくことを心がけてください。音忘れは、ストレスが大敵です」

男、この辺りでゆっくり退場。

女 「わかってます。ストレス、ですよね」

医者 「ええ、ストレス。お住まいの環境がストレスになっているようでしたら、しばらく入院していただくこともできますが、まあ、そちらの方がストレスになる場合も多いんですけどね」

女 「入院は、大丈夫です」

医者 「そうですか。ま、とにかく、リラックスして過ごしていただくことが一番ですから」

女、席を立ち、医者とは反対方向へ歩きだす。医者、女とは反対方向へ進み、のまま退場。

女、舞台の端まで移動すると、また舞台の中央へ向かう。

席に座る。女の自宅である。

女、どこか遠くを見つめている。

鼻歌を口ずさもうとするが、途切れ途切れになり上手くいかない。

女、また無言になる。

女 「……音を……」

男、出てくる。遠くから女を見つめている。

女 「音……」

インターホンの音。

女、反応して音の鳴る方向を見つめるが、それ以上動かない。

再度インターホンが鳴る。女、視線をゆっくり元に戻す。

女 「何の、音だったかしら」

インターホンが鳴る。女、全く反応を示さない。

女、コーヒーを淹れようと思い、ぼんやりと席を立ち、歩く。

途中、雨粒が窓にあたる音がして、立ち止まる。
雨が降りはじめると。
女、観客側にある窓をゆっくりと見つめる。

女

「〇〇、」

—了—